

生達の月旦などをしながら、千駄木の家に歸つて往つた。序ながら濱田君の書いたものに誤植の多いのは有名なこととで、麗々しく大字で印出した表題の文字にまで間違があつて、流石に閉口の體であつたこともあるが、那珂博士のこの書にも、四頁に一つの割合よりも遙かに多くの誤りのあることは何時でも證示することが出来る。濱田君が丹念にその誤植を捜し出す程の考證學者でなかつたお蔭で、博士の首も進物にならずに済んだのは目出たいことであつた。

同じ『史學雜誌』の編輯中の事だが、歐文の雜誌目錄の校正が自分にまはされた。濱田君の原稿は例の達筆で、他人には読みかねる字を平氣で書き流してある。そのTの字が妙に書きなぐつてある爲に、植字工に判らぬと見えてみな間違つて居り、訂正するのに甚だ面倒であつた。それがあまりに頻出するので、「君のTは他人に判りにくいから注意してくれ」と何氣なくいうた積りが大いに肝癢に障つたと見え、「君のKは初めも中も同じ大字で書いてある。氣をつけ給へ」と立ちどころにやり返した。「少々大ききたつて小さきたつてKはKと讀めるが、君のTは誰にもTと讀めないのだから困る」といふと、「讀めない奴が悪いのだ」と突つ張り、徹頭徹尾注意しようとはいはない。「勝手にしろ」「勝手にしてゐるものを餘計なおせつかいをするのだ」といふやうなことで、結局Kたり難くTたり難い他愛もない喧嘩分れになつてしまつた。三十前後までの濱田君は大概こんな調子で、すべて自分に刃向つて來るものは少々無理でも跳ね返さずにはおかず、太平無事な時には態々喧嘩の對手を求めて誘をかけるやうなこともあつた。かういふ負けず嫌の強氣は、晩年になるに従つて見かはす程に柔になつては來たが、それでもなほ時々鋭鋒を露はして、對手の如何を問はず、徹底的に克服する場面を幾度となく演出した。しかしそんな時で